

ヒューマノイド

伊坂 幸太郎



登場人物の言動の意味を考え、自分の解釈を語り合おう。
[学習活動]

目標

- 文章の構成や場面の展開についての理解を深める。
- 過去と現在、伏線と結末の関係を読み解き、登場人物の言動の意味を考える。

約束を思い出したのは、職場の会議室にいたときだ。打ち合わせて、各部署の担当者がテーブルをぐるっと囲んでいた。十数人はいる。

会議中の緊張感は苦手だった。入社して八年がたつけれど、年下の社員のほうがしつかりして見えるし、自分の発言に手応えを感じたこともない。

休憩に入ったところで、隣に座っていた先輩社員が、「失敗したなあ。」とため息をついた。彼女は先ほどの説明がうまくいかなかったことを反省しているのだ。

「特に問題なかったと思いますけど。」

「恥かしいやつだ。」

その瞬間、頭の記憶の箱、その錠に鍵がかちやりと入ったような感覚を覚えた。

「人間は、恥かしいと思うようにできていますから。」

そう口にした自分に、はつとする。十数年前、同級生から聞いた言葉だ。

ふと気になり携帯端末を触り、カレンダーを確かめ、シヨックを受ける。

タクジの顔と言葉が浮かぶ。六月十日に会おう。じゃあ、三十歳になったときに。

9	9	5	4
漢	漢	漢	手
錠	憶	鵲	応
ジョウ	オク	ケイ	イ
		(いこい)	意
錠	記憶	休憩	

三十歳の六月十日は、今日だ。そう思ったところで進行役の上司が、「それでは会議を再開します。」と立ち上がった。

タクジとは、特別仲がよいというほどでもなかった。所属する部活動も違い、中学校以外の場所ですぐだ記憶もない。もっと親しい友達に別れた。ただ、彼と教室でたわいもない話をするのは好きだった。

「僕がヒューマノイドロボットを作るなら。」

タクジは、よくそういう言い方をした。姿や考え方が人間そっくりの、もしくは人間以上の知能をもつロボットを作るとしたら、という意味だ。

例えば僕が、「ゲームをやっている、すぐ飽きてしまうんだ。」と言うと、タクジは、「僕がヒューマノイドロボットを作るとしたら、『飽きる』機能は付けるよ。」と真面目な顔で主張した。「人間はあえて、飽きるようにできている。そう思うんだよね。」と。

「できている、ってどういうこと。」

「飽きるものがなかったら、ずっと同じことをやっているだけになるだろ。飽きるからこそ、新しいことをやろうとする。新しいことをやるから人間は進歩したんだ。『飽きる』という機能がないと、人類は進歩しない。」

20 . . . 15 . . . 10 . . .



5	9	13
た	も	機
わ	し	能
い	く	意
も	は	
な	文	
い		
意		

人類の進化とは大げさだな、と僕はあきれた。

「だから、僕がヒューマノイドロボットを作るとしたら、『飽きる』機能は絶対に付ける。」何をばかなことを言っているのだ、と僕は思ったが、自分が勉強に飽きてくると、「これは人間が誰しももっている機能なのかもしれない。」と考えるようにはなった。

そもそもタクジと話すようになったのも、「人間の機能」の話題がきっかけだった。「恥ずかしくなる」機能について、だ。

その日、僕は登校中に恥をかいだ。交差点の赤信号で止まっているとき、左前方に同級生らしき姿を見つけ、「アイコ、おはよう。」と声をかけた。相手が振り返り、それがアイコではなく、上級生だとわかったときには、ぞっとした。向こうはげんそうに眉をひそめていたが、僕は、「間違えました。」とも「すみません。」とも言えなかった。取り繕うように髪の毛を触り、信号が切り替わるのを待ただけだった。そこを、タクジに目撃されたのだ。からかわれるにちがいない、と覚悟した。けれど、彼は笑うでもなく、「どうして人間って恥ずかしくなるのか、前から不思議だったんだよね。」と真剣な顔で言うものだから、驚いた。

「どういうこと。」

「だって、恥ずかしい気持ちなんて要らないじゃないか。誰かに迷惑をかけたならまだしも、人前で転んだだけでも恥ずかしくなる。恥をかくと、見捨てられたような気持ちになるし、自分の評価が地におちたような気分になる。そんな機能があって、何の役に立つんだろう。」僕は困惑した。「恥ずかしさ」と「機能」を結び付ける人に初めて会った。

20 15 10 5

- 10 ぞっとする **意**
- 10 眉をひそめる
眉を開く
眉ひとつ動かさない
眉根を寄せる
- 11 取り繕う **意**
- 19 地におちる **文**
- 10 漢 眉 **ミ**
眉
- 12 漢 替 **タイ**
かわる
切り替わる
- 17 音 迷惑 **メイワク**

少しすると彼が、「あ、わかった。」と、うれしそうにこっちを見た。「失敗を繰り返さなためかな。こんな恥ずかしいことはもうごめんだ、と思って、次には気をつける。そのための機能なのかも。」

「でも、大勢の前で名前を呼ばただけでも恥ずかしくなるよ。失敗したときだけではなく、目立ただけで恥をかく。」

「確かに。」タクジも認めた。少し考えた後で、「もし僕がヒューマノイドロボットを作るなら、人間の恥ずかしい気持ちを理解できるようにする。」と宣言するように言った。

「え。」

「人間にとって、恥をかくか、かかないかというのは重要なことだろ。恥ずかしかった記憶はいつまでたっても、くつきりと覚えている。恥をかいだことで泣く人もいれば、怒る人もいる。そんなこともわかってくれないロボットなんて信用したくない。」

20 15 10 5

- 13 思いをはせる **文**
- 18 面もち **意**
- 19 動揺する **類**
- 13 訓 飛び交う **とびかう**
- 17 漢 鎖 **サ**
くさり
連鎖反応
- 19 漢 憧 **ショウ**
あこがれる
憧れ

会議で飛び交う発言をよそに、僕は中学時代のことに思いをはせている。

授業中に、恥ずかしい言い間違いをし、同級生たちから笑われたことがあった。たいしたミスではなく、だからこそ周りも気楽に笑ったのだろうが、僕自身はどうしていいのかわからず、顔を引きつらせ、弱々しい笑みを浮かべるだけだった。

すると、すぐにタクジが手を挙げた。そして、別の言い間違いをした。「連鎖反応です。」と、彼が真面目な面もちで言うのと、教室がまたどっと沸いた。

今から思えば僕は、恥をかく場面でも動揺しないタクジに、憧れに近い思いを抱いていたのかもしれない。失敗や不運に對し、いちいち落ち込む自分とは違うのだ、と。

20

- 13 訓 飛び交う **とびかう**
- 17 漢 鎖 **サ**
くさり
連鎖反応
- 19 漢 憧 **ショウ**
あこがれる
憧れ

とができなかった、と先生が申し訳なさそうに説明するのを、僕は窓の外を眺めながら聞いていた。

会議はいつのまにか終わっている。資料の整理を終えると、窓の外が既に暗い。挨拶をし、職場を後にした。

エレベーターの中で携帯端末を触り、再び日付を確認める。六月十日はロボットの日、と心の中でつぶやく。

タクジが引越した後、僕は連絡を取ろうと思ったものの、行動には移さなかった。最後のやり取りに後ろめたさがあり、その後ろめたさと向き合うことを避けていたのだろう。部活動の大会や高校受験のあれやこれやで忙しいのいいことに、結局、それきりになった。ただ、時おり、タクジとの最後のやり取りのときの自分の態度を思い出すと、胸の奥に重苦しいものを感じた。

駅のホームで、電車が来るのを待っているときも、僕はタクジのことを考えていた。あの美術の授業で、タクジはわざと転んだわけではなかった。謝ってくれた。

プラットホームに設置されたディスプレイ広告が目に入った。カラフルな絵の具がはじける映像が繰り返されている。頭の中を小突かれたような気分になった。

自宅とは逆方向に行く列車に乗り込んでいた。

駅を出るとすぐに目的の場所に着いた。昔、駅前広場だった場所は、ドーム型球場を小さくしたような施設となっている。スポーツの試合やコンサートの会場として使われることが

20 15 10 5

9	4	4	4
漢	漢	漢	漢
避	拶	挨	既
さける	サツ	アイ	すてに
避ける	挨拶	挨拶	既に

多く、僕も何度か来たことがあった。

入り口近くには、「ロボットの日」と表示があり、イベント内容が示されていた。今もタクジが、ロボットに興味があるのならこれを見に来ているのではないか、と期待が増す。日も落ちたから、終了しているのかと思いきや、まだ開催中だ。「入場無料」の文言にも後押しされ、僕は吸い込まれるように中に入った。

ドーム内は広々としていて、中央にはステージが置かれていた。そこから外側に向かって、傾きをつけて観客席がぐるっと囲んでいる。

ステージ上では二人の人間が距離を取り、キャッチボールをしていた。長い距離を緩やかな山を描くように飛び、ボールが行ったり来たりしている。ポーン、と放られたものが、ポーン、と戻ってくる。その軌道を眺めているだけで気持ちよくなったが、高い位置に設置された大型ビジョンの映像を見て、その一方が人間ではなく、ロボットだとわかった。

ロボットがキャッチボールの相手をしているのだ。

「ロボットが人の形をしている必要はありませんが、このロボットは子供から高齢者まで、人と触れ合うことを目的としているため、人の形に似ているほうが安心感をもってもらえると考えました。」と開発者らしき人の説明が、スピーカーから聞こえてきた。「AI機能により、相手に合わせて反応も変えられます。」

そのAI機能で人探しはできないのかな、と思いながら僕はタクジの姿を探し、あちこち歩き回った。観客席にいる人たちの顔を確認めていく。

少しすると、タクジが今日ここに来る可能性はかなり低いことに気がついた。僕もまたま思い出したただけなのだ。そもそも、中学生の頃のタクジの顔しか知らない。万が一、彼が

20 15 10 5

10	4	20	15
漢	漢	万が一	AI
軌	催	文	人工知能
キ	もよおす		人間の知能を
軌道	開催		コンピュータを用いて人工的に再現したもの。

ここにきていたとしても、わかるわけがなかった。
一気に疲れて、僕は空いている席を見つけると腰を下ろした。明日の仕事を考えながら、ロボットの滑らかな動きを、ぼんやりと眺める。先ほどまでキャッチボールをしていたロボットが今度は移動し始めていた。予想以上に滑らかに歩行している。
「ロボットに付いたカメラは、遠くの映像も拡大して届けてくれます。」開発者が説明すると、大型ビジョンに、観客席の様子が映し出された。移動するロボットのカメラが捉えたものだろう。
僕は感心したが、最後まで見ている必要もないと思い、席から立つ。ゆっくりと出口へ向かうとした。
すると、「あ。」と観客席から声が上がった。何事かと振り返れば、ステージ上の器具にぶつかり、ロボットが転倒したところだった。
「ああ、そういえば、言い忘れていました。」とマイクを通した声が聞こえる。「このロボットは転んでも、自分で起き上がります。転ぶことはしかたがありません。大事なのは、起き上がることです。」
ふとその言葉に引っ掛かりを覚えた。ほぼ同時に、「久しぶり！」と大きな声がドーム内に響き渡った。
ぎよっとし、通路上で動けなくなる。スピーカーから流れる開発者の声だった。
「元気だった？」

20 . . . 15 . . . 10 . . . 5 . . .



大型ビジョンの映像が切り替わり、ステージ上の開発者が映った。手を振っている。僕は通路で棒立ちになったまま、しばらく動けなかった。
「皆さん、友人が来てくれました。」と彼は無邪気に言い、そして僕の名前を呼んだ。約束のことを覚えていたのか、それとも約束とは無関係に、このイベントに参加していただけなのかはわからない。ただ確かに、彼はそこにいた。ロボットの日、三十歳のときに、だ。彼が操作したのか、それともAIが判断したのか、ロボットが僕の方を指さし、その後で手を振った。

「タクジ！」と叫びたかった。ただ、言葉が外に出なかった。胸に空気が詰まっているかのようだ。タクジ、あのときはごめん。それをどうにか伝えないと、とあせる。観客席にいる人たちが、僕に注目していた。ドーム中の視線が集まるかのようだ。僕の顔は真っ赤になっていたにちがいない。
こちらに手を振るヒューマノイドロボットは、この恥ずかしさをわかっているようには、とうてい見えなかった。
タクジ、聞いていた話と違うじゃないか。

10 . . . 5 . . .



作者 伊坂幸太郎 一九七二（昭和四六）——千葉県出身。小説家。
著書 「重力ピエロ」「アヒルと鴨のコインロッカー」「チルドレン」「死神の精度」「ゴールデンスランパー」「逆ソクラテス」など。
出典 本書のための書きおろし。



junaido・絵



「カザアナ」森 絵都



「逆ソクラテス」伊坂幸太郎

広がる読書

3 無邪気類
漢 邪
叫 漢

無邪気
叫ぶ

